

「消化器内視鏡 2. 大腸・小腸」

東京大学助教授 武 藤 徹一郎 編集

仙台市医療センター副院長

望 月 福 治

本書は消化器内視鏡テキスト全3巻のシリーズの第2巻に当たり、大腸の部は「大腸の局所解剖」，“検査法および治療法”，“特殊な内視鏡検査”および“診断のすすめ方”と4章に分けて記述されている。内容は具体的でわかりやすい。例えば“局所解剖”の章では、大腸ファイバースコープの挿入が難しいのはどの部位であるのか。そこは解剖学的にどんな構造になっているのか。したがってどのように挿入すればよいのかというように、理論的に実地に即して説明されている。また大腸の可動性に富む部位では、挿入にあたり腸管に無理な伸展を生じ、患者に不快感や疼痛を起こしやすいなどという気配りの行き届いた記述もある。いわば内視鏡の解剖学とも言うべき内容である。

“検査法および治療法”の章では、検査のすすめ方の基本としての挿入法と検査法はもちろん、生検については、炎症性疾患と潰瘍性疾患、腫瘍性疾患の特徴を取り上げながら、どの部位から採取すべきか、実際の解説がなされているばかりか、生

検標本の取り扱い方と、介助者とのコンビネーションの問題も触れられている。

また、ポリペクトミーの部では、ポリープの位置とスネアのかけ方の基本、スネアのかけ方の困難な例の患者の体位変換による克服法などは、実際の読者の参考になるであろう。

一方、摘除ポリープの取り扱い方については、“ポリープを摘除した時点ではその役割の半分が果たされたにすぎない”，“摘除ポリープの正しい方向性を考えて切り出すことは、組織学的検索によって治療方針を決定するという重要な役割がある”といった著者らの内視鏡に取り組む厳しい姿勢を感じとることができる。

更にポリペクトミー患者管理と予後については、症例に応じた具体的な定期的追跡検査が紹介されており、診療の指針を与えてくれる。

第3章の“特殊な内視鏡検査”では、色素内視鏡，拡大内視鏡，小児および高齢者の内視鏡から術中内視鏡検査，大腸集検，機能検査と、き

め細かく、しかも要点が網羅されている。

第4章の“診断のすすめ方”は大腸疾患のガイドブックとも言うべきものである。炎症性疾患，潰瘍性疾患，悪性腫瘍，ポリープおよびポリポーシスなど主要疾患が，概念，X線検査も加えた診断の手順，生検病理学的所見，鑑別診断などについて要領よくまとめられている。ここではカラー図譜に付けられたシェーマも初心者にとってわかりやすい。

小腸に関しては、プッシュ法，ゾンデ法，ロープウェイ法の解説と手技，生検，機能検査などについても紹介されている。

本書の冒頭で編者は“研修医，初心者のための入門書のみでなく，専門医への入り口となるべく技術解説と理論的裏付けをもった内容を具備すべく企画した”と述べている。大腸内視鏡のエキスパートである著者らの意図と熱意が十分に感じとられる魅力的な書である。

“禽獣はくらい，人間はたべる。教養ある人にして始めて食べ方を知る”とはさる人の言葉である。この書を一読すれば教養豊かな知識をもった内視鏡医こそ，初めて疾病を咀嚼できることが理解されるであろう。大腸内視鏡に興味をもつ多くの人にお薦めしたい本である。

B5判 232頁 図50 写真71

原色図97 1987 ¥22,000 千400

医学書院 刊